

大学生の職業意識に関する研究

甲 村 和 三・寺 本 一 美*・古 川 周 史**

人文社会教室

(1983年9月3日受理)

Psychological Research on Vocational Attitudes of College Students.

Kazumi KOHMURA, Kazumi TERAMOTO and Shuji FURUKAWA

Department of Humanities

(Received September 3, 1983)

The purpose of this study was to investigate vocational attitudes and vocational choices of college students (mainly freshmen and sophomores). Questionnaires were used. Results are as follows: College students believe that in the future, talents and abilities will be more important determinants of vocational success and promotion than school career or seniority. Many of them, however, are diverted from work to private life and have the conservative conceptions on job-change, the social prestige of occupation and so on. As yet, their vocational attitudes and vocational choices are not fully realistic.

1. 緒 言

本調査研究は大学生の職業意識, 選職行動, 及び就職動向などの分析を通して成果を職業指導(進路指導)の基礎的研究と実践活動に資することを目的としている。今回はとりあえず職業意識の概観的分析を試みる。対象は一部分を除いてほとんどが卒業まで未だ十分な間がある3年次以下の学生群である。

いうまでもなく、学生にとって「就職」は最大関心事であり、将来、社会人としての出立にあたり、まず選択を強いられる課題である。大学生は高校や大学への進学に際して既にいくつかの選択を経験しており、それを通じて少しずつ自分の職業的興味の幅を狭めてきており、相応のキャリア発達がなされている。そして、大学卒業の年はいわば総決算の時期と考えてよい。しかし、わが国では“ともかく大学に入りさえすれば”の風潮が未だ根強く、何のためにという入学の目的の希薄な、いわゆるモラトリウム(Erikson, E.H., 1956)学生も多いように見受けられる。そして、卒業年次に至って初めて世間の風当りの厳しさを体感することが少なくない。しかも、「大卒」の学歴のもつ世間的価値が最近ではかなり低下してきているといってもよいであろう。こうした時代や社会風潮の下で、学生自身の意識、いわば内側からみた

職業意識や勤労観の動向や変遷を問うてみたい。なお、青少年の職業意識などの調査は総理府青少年対策本部などをはじめとしてしばしば報告がなされているが、われわれは身近な学生たちの職業意識やその動向を知りたいのであり、それによって、彼らの career education の一助にと考え、資料を累積したいと思うものである。

2. 調 査 対 象 者

N大学(名古屋市内の国立工科大学)145人, A大学(名古屋市郊外の私立文科系(文・商))123人。

調査対象者の性別、学年別人数は次の通りである。

表1 調査対象者の分類

大 学	総数	男	女	1 年	2 年	3 年	4 年
N 大	145人	141人	4人	143人	2人		
A 大	123人	76人	47人	47人	7人	59人	10人

3. 調 査 実 施 時 期

昭和56年10月～昭和57年1月

4. 調 査 方 法

* 同朋大学

** 岡崎工業高校

卒業後の進路、就職の参考事項、昇進の願望地位、学歴観、魅力ある会社の条件、出世・成功の条件、職業意識（職業観・勤労観）などに関する質問紙を用い、直接記入の方式をとった。なお、回答形式は多肢選択法及び評定尺度法を用いた。

5. 調査の結果とその考察

結果は質問項目の番号順に記述する。そして、ここでの分析の指標としては主に頻度（％）を用いるが、質問項目によっては内部相関係数にも着目したい。なお、サンプル数が余り多くないこともあり、本報告では全対象者の傾向と男女別を中心に論じ、必要に応じて大学間の違いについても言及してみることにする。

- (1) あなたは現在の学校を卒業後、どのような進路を希望していますか。次のうち、1つを選んで下さい。

- 1 就職（家事、家業従事を含む）
- 2 就職進学
- 3 進学（各種・専修学校を含む）
- 4 未定
- 5 その他（ ）

表2 卒業後の希望進路（％）

No.	MALE	FEMALE	TOTAL〔ドスウ〕
1	75.5	84.3	77.2〔207〕
2	3.6	11.7	5.2〔14〕
3	11.9	1.9	10.0〔27〕
4	7.8	1.9	6.7〔18〕
5	0.9	0.0	0.7〔2〕

就職希望が圧倒的に多い。また工科系N大の方が文科系A大に比して大学院進学希望が高い（A大2.4％に対してN大16.5％）

- (2) 卒業後、就職を希望している方（前問で1、2と答えた方）のみお答え下さい。

就職を希望するのはどの理由によりますか。次のうちから1つを選んで下さい。

- 1 ともかく社会に出て働きたい
- 2 学問的な勉強をするのが好きでない
- 3 自分の成績や学力ではより上級校への進学ができそうにない
- 4 自分の能力・適性を考えて
- 5 経済的な事情で進学するのは無理だ

- 6 家業を継ぐことになっている
- 7 両親やまわりの人が進学に反対している
- 8 その他（ ）

表3 就職希望の理由（％）

No.	MALE	FEMALE	TOTAL〔ドスウ〕
1	44.7	53.0	46.5〔102〕
2	4.7	0.0	3.6〔8〕
3	3.5	0.0	2.7〔6〕
4	33.5	22.4	31.0〔68〕
5	6.4	6.1	6.3〔14〕
6	2.9	2.0	2.7〔6〕
7	0.0	0.0	0.0〔0〕
8	4.1	16.3	6.8〔15〕

「ともかく社会に出て働きたい」、「自分の能力・適性を考えて」が圧倒的に多く、大学間の違い、性差もみられない。

- (3) 全員にお尋ねします。

あなたが就職を考えると、次のうちどの仕事が一番望ましいと思いますか。最も重視するものを1つ選んで下さい。

- 1 高い収入が得られる仕事
- 2 失業のおそれがない仕事
- 3 働く時間が短く、自由な時間が多い仕事
- 4 昇進や成功のチャンスの多い仕事
- 5 自分の能力が思いきり発揮できる仕事
- 6 仲間と楽しくすごせる仕事
- 7 世の中のためになる仕事
- 8 その他（ ）

表4 最も望ましいと思う仕事（％）

No.	MALE	FEMALE	TOTAL〔ドスウ〕
1	28.4	2.0	18.3〔23〕
2	6.0	0.0	3.7〔4〕
3	4.5	0.0	2.8〔3〕
4	43.3	46.8	44.6〔55〕
5	8.3	12.7	10.0〔12〕
6	3.8	4.2	3.9〔4〕
7	0.0	0.0	0.0〔0〕
8	5.3	34.0	16.3〔20〕

「昇進や成功のチャンスの多い仕事」が最も重視され、次に男子は「高い収入が得られる仕事」、女子では「自分の能力が思いきり発揮できる仕事」を挙げている。男

子の“家庭経済の支柱”としての性役割の自己認知が窺われる。また、昇進や仕事上の成功達成には大企業よりも中小企業の方が容易なはずである。卒業期に近づけば企業の安定性・将来性と地位・収入といった願望項目の間にアンビバレントな感情が働き、折衷を余儀なくされるよう。

なお、項目の選択順位において大学間の差異はなかった。

- (4) あなたが希望する職業につこうとする場合、次のどの事
がらを考慮して職業を選びますか。最重要視するものか
ら順に3つまで選んで下さい。

- 1 出身校の社会的評価
- 2 出身校の専攻学科
- 3 職業資格（公務員試験、技能検定など）
- 4 縁故関係
- 5 家族、親類の意見・希望
- 6 学業成績
- 7 自宅近くによい勤め口がある
- 8 性別
- 9 自分の適性
- 10 その他（ ）

表5 職業選択の際の考慮事項(3肢選択)(%)

No.	MALE			FEMALE			TOTAL		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3
1	5.1	3.7	6.6	0	0	0	4.1	3.0	5.3
2	27.2	28.7	13.6	17.6	35.3	15.7	25.4	30.0	14.0
3	8.3	19.4	16.9	7.8	29.4	27.5	8.2	21.3	18.9
4	1.4	2.3	5.2	0	2.0	9.8	1.1	2.2	6.1
5	1.8	11.1	16.0	2.0	9.8	13.7	1.9	10.9	15.5
6	2.3	10.2	15.0	5.9	7.8	9.8	3.0	9.7	14.0
7	1.4	6.5	11.7	0	3.9	5.9	1.1	6.0	10.6
8	0	0.9	0	0	0	2.0	0	0.7	0.4
9	52.5	17.1	15.0	66.7	11.8	15.7	55.2	16.1	15.2
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0

全体では適性を第1に考え、次いで専攻学科、資格、家族などの意見などが重視される。選択された項目やその順位に性差はほとんどない。また、N大（工科系）ではA大（文科系）に比して専攻学科や成績を重視するものが多い。さらに、N大では家族や親類などの意見を重視する者も多く、選職に際しての判断を家族がかりでと考える者が多いことを示唆する結果であった。

- (5) あなたが就職先を選ぶとき、参考にしようとするのは次のどれですか。主なものを重要と思う順に3つまで選ん

で下さい。

- 1 新聞、テレビ、ラジオなどの広告
- 2 学校の就職係や先生の指導・意見
- 3 公共職業安定所
- 4 民間の就職情報誌
- 5 民間の就職あっせん機関
- 6 家族や親類の助言
- 7 学校の先輩や友人の助言
- 8 会社の求人案内やパンフレット
- 9 その他（ ）

表6 就職先選択の参考事項(3肢選択)(%)

No.	MALE			FEMALE			TOTAL		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3
1	2.8	3.2	3.7	3.9	0	2.0	3.0	2.6	3.4
2	68.2	12.0	8.8	52.9	11.8	15.7	65.3	11.9	10.2
3	0.9	4.6	5.6	2.0	11.8	3.9	1.1	6.0	5.3
4	5.1	15.7	8.8	9.8	5.9	13.7	6.0	13.8	9.8
5	0.5	1.8	2.8	2.0	5.9	2.0	0.7	2.6	2.6
6	8.3	19.4	21.9	13.7	25.5	15.7	9.3	20.5	20.7
7	5.5	26.7	25.6	5.9	25.5	23.5	5.6	26.5	25.2
8	7.8	16.1	20.9	7.8	13.7	19.6	7.8	15.7	20.7
9	0.9	0.5	1.9	3.9	0	3.9	1.1	0.4	2.3

全体では教師依存の程度が甚だ高い。次いで先輩や友人、家族や親類の助言の順であるが、ヒトには頼っても公的・私的機関やその情報を重要視する者が少ないのは問題である。活用について不慣れなせいもあるだろうが、選職に際しての自立性発達が未熟なようである。大学間の差異、性差はほとんどみられない。

- (6) あなたの願望として（条件を無視して）、就職したあかつきには次のうちのどの地位までの昇進を望みますか。1つを選んで下さい。

- 1 ヒラ 2 係長 3 課長 4 部長 5 常務 6 専務 7 社長

表7 なれるものならなりたい昇進地位(%)

No.	MALE	FEMALE	TOTAL〔ドスウ〕
1	1.8	11.7	3.7〔10〕
2	0.4	7.8	1.8〔5〕
3	4.6	17.6	7.0〔19〕
4	27.6	27.4	27.6〔74〕
5	11.0	1.9	9.3〔25〕
6	17.0	15.6	16.7〔45〕
7	37.3	17.6	33.5〔90〕

“一切の条件を無視して”と問うたにもかかわらず、企業のトップまでの昇進願望は全体で30%ほどにすぎない。次いで部長職、さらに専務・常務の取締役といった順である。自己認知で醒めすぎて条件無視ができなかったか、あるいはあまりに責任ある地位に昇るのは嫌だという最近の若者世代の風潮の一端であろうか。しかも傾向には大学間の差異がほとんど見うけられない。また、性差は若干認められ、女子は男子ほど高位を望まず、せいぜい部長職どまりであった。

- (7) あなたの適性・能力・学業成績など、今の自分を冷静にみつめて、将来、どの程度の地位まで昇進可能と思いますか。1つを選んで下さい。

1 ヒラ 2 係長 3 課長 4 部長 5 常務 6 専務 7 社長

表8 昇進可能と思う地位(%)

No.	MALE	FEMALE	TOTAL〔ドスウ〕
1	7.3	41.1	13.8〔37〕
2	10.5	27.4	13.8〔37〕
3	35.0	21.5	32.4〔87〕
4	30.4	3.9	25.3〔68〕
5	10.5	0.0	8.5〔23〕
6	1.8	1.9	1.8〔5〕
7	4.1	3.9	4.1〔11〕

“自分をみつめて”の昇進可能な地位は、全体では課長(32%)、部長(25%)となっている。この質問では大学間で差異が若干みられ、男子の資料でみると、N大では部長(37%)、課長(33%)であるのに比して、A大では課長(38%)、部長(18%)の順位と程度であった。一方、性差をみると、女子では圧倒的にヒラどまりを予想し、高い地位でも男子に比して1ランク低いことが特徴であり、現実的である。期待と現実のギャップは早晚現われることになるが、「大卒」の資格の価値の低下から考え、N大の学生の自信過剰ぎみなところがやや気になる。もっとも夢があるからこそ働く意欲も生じようというもののだが。

- (8) あなたは初任給として、最低の手どり月収でいくらくらいを希望しますか。1つを選んで下さい。

1 5～7 2 8～10 3 11～13 4 14～16 5 17～19 6 20～万円

表9 最低希望初任月収(手どり額)(%)

No.	MALE	FEMALE	TOTAL〔ドスウ〕
1	0.9	0.0	0.7〔2〕
2	6.9	25.4	10.4〔28〕

3	54.8	58.8	55.5〔149〕
4	29.0	13.7	26.1〔70〕
5	4.1	0.0	3.3〔9〕
6	4.1	1.9	3.7〔10〕

給与は多いにこしたことはないが、“最低では”の条件で現実的結果(11～13万)となったようだ。また、男子はそれ以上を望む者も多いのに比し、女子は逆にそれより多少少なくともよいとする傾向が特徴的である。

- (9) 学歴についてはいろいろの考え方があると思います。次のうち、あなたの考えに最も近いものを1つ選んで下さい。

- 1 大学を出ていないと有利な地位についたり、高い収入を得ることができない。
2 大学を出ていないと、地位とか収入は別としても、ともかくひけめを感じる人が多い。
3 大学を出ていなくても、技能やすぐれた技術があれば有利な地位についたり、高い収入を得ることができる。
4 大学を出ているかどうかはさして意味がない。
5 その他()

表10 学歴についての考え方(%)

No.	MALE	FEMALE	TOTAL〔ドスウ〕
1	24.4	13.7	22.3〔60〕
2	11.5	5.8	10.4〔28〕
3	49.7	60.7	51.8〔139〕
4	11.9	15.6	12.6〔34〕
5	2.3	3.9	2.6〔7〕

全体傾向では、「技能やすぐれた技術があれば大卒でなくてもよい」、とする意見が圧倒的である。ただ、それは結果論でもあり、現場経験による獲得が難しいと思うから学ぶ目的が生まれるともいえる。両大学間では1位の選択肢は同じであったが、次いでN大では「大卒でないと地位や収入に不利」とする者が多い(以上2項目を選択した者が多い)のに比し、A大の男子で「地位・収入の面で不利」とする意見とともに「大卒かどうかはさして意味がない」、とする選択が2、3位で同率(22.3%)であった。また、N大では大学を出ていないとひけ目を感じる者も相当数(11.3%)みられた。なお、男女間には特に差異はなかった。結果は工科系——文科系、国立——私立の違いが絡みあっているようである。

- (10) あなたにとって魅力ある会社とは次の条件をどの程度必要としますか。該当する程度に○をつけて下さい。

- 1 会社の知名度、社会的評価
- 2 会社の規模
- 3 幹部のメンバーの充実
- 4 給与条件のよさ
- 5 福祉、保障制度、施設のよさ
- 6 安定度、将来性
- 7 勤務が都心で便利なこと
- 8 労働条件のよさ
- 9 人材、能力評価の方法の正当性、客観性
- 10 会社の社会的役割の正当性
- 11 行動、発言の自由の保障
- 12 人材登用、昇進の機会均等
- 13 年功序列制
- 14 実力主義、能力主義
- 15 好ましい人間関係が得られる
- 16 海外派遣のチャンス

表11 魅力ある会社の条件(%)

No.	要 ま と つ た く い 必 要	で あ は ま り い 必 要	や や 必 要	か な り 必 要	非 常 に 必 要
1	0.0	8.2	38.0	41.7	11.9
2	0.7	13.4	29.1	40.6	16.0
3	0.0	6.3	25.3	35.0	33.2
4	0.0	1.4	25.0	40.2	33.2
5	0.0	2.9	18.6	35.8	42.5
6	0.0	1.4	7.4	27.9	63.0
7	3.3	19.7	41.0	25.0	10.8
8	0.0	0.3	16.7	38.0	44.7
9	0.7	1.4	12.3	34.3	51.1
10	1.4	7.0	28.7	38.8	23.8
11	0.3	4.8	22.3	39.1	33.2
12	0.3	2.6	17.1	51.4	28.3
13	13.8	35.4	35.0	11.9	3.7
14	0.7	5.2	31.7	41.7	20.5
15	0.0	0.7	11.1	37.6	50.3
16	8.5	41.0	24.6	15.2	10.4

結果は紙数の制約上、全対象者のそのみを表11に提示する。

魅力ある会社の条件として、必要とする順位の高いものとしては、「安定度、将来性(6)」、「人材、能力評価の方法の正当性、客観性(9)」、「好ましい人間関係が得られる(15)」などである。会社の安定性や社内の人間関係は、

従前の諸調査でもよく挙がる項目だが、「人材・能力評価の方法の正当性・客観性」の項目を必要視する結果は興味深い。おそらく、自分の能力に相応の自信があり、それに対する評価の公正さを期待する結果であると思われる。また、この項目が、「人材登用、昇進の機会均等(12)」（ $r = .353$ ）、「実力主義、能力主義(14)」（ $r = .325$ ）との高い相関もみられることから、個人の能力が発揮でき、学歴等にとらわれず、等しく正当に評価されることを望み、自分の能力等にふさわしい場を与えられることを期待しているものと考えられる。その他の項目として、「労働条件」、「厚生福利制度充実」、「給与条件のよさ」、「行動や発言の自由」、「昇進等の機会均等」などが高い評価をうけた。男女間では、全体として大きな差はないが、男子は「安定度、将来性」を第1に挙げたのに比し、女子は「人間関係のよさ」を挙げた。この差異は、勤労に対する性役割観の違いとみてよいであろう。また、大学間には顕著な差異はなかった。

- (11) あなたは会社における出世、成功の条件は何だと思えますか。次の各項目ごとに出世、成功の必要度を○で記入して下さい。

- 1 才能があること
- 2 努力すること
- 3 幸運にめぐまれること
- 4 人柄がよいこと
- 5 処世術がうまいこと
- 6 学歴が高いこと
- 7 家柄がよいこと
- 8 財産があること
- 9 父親の社会的地位が高いこと
- 10 縁故関係があること

表12 会社における出世・成功の条件(%)

No.	要 ま と つ た く い 必 要	で あ は ま り い 必 要	や や 必 要	か な り 必 要	非 常 に 必 要
1	0.7	2.6	17.1	43.6	35.8
2	0.7	0.7	4.4	34.7	59.3
3	0.7	4.4	33.2	36.9	24.6
4	1.1	5.2	23.5	46.2	23.8
5	2.2	9.3	30.5	32.8	25.0
6	3.7	18.2	42.9	27.6	7.4
7	24.6	42.5	23.5	6.3	2.9
8	30.5	42.5	19.7	4.8	2.2
9	29.4	34.7	22.3	7.4	5.9
10	16.0	26.8	30.2	18.2	8.5

紙数の制約で、全対象者の集計結果のみを表12に示す。出世、成功の条件として最も重視されるのは、「努力(2)」で、「才能(1)」、「人柄(4)」、「幸運(3)」、「処世術(5)」がこれに続いている。「努力」が高く評価されるのは、社会一般に称揚される美德であることの外に、青年の精神主義的な心性によく一致するためでもあろう。

「才能」「人柄」については、「才能」は当然としても、それと同程度に人柄が重視されているのは興味深い。大学生は、これまで経験してきた能力中心の進学競争と社会という場での立身出世競争との質的な違いを彼らなりに把握しているようである。

「幸運」や「処世術」が上位にあげられていることから、出世、成功に個人の力では処しきれない要因の力の大きさを学生が感じていることがわかる。『日米高校生比較調査』(1979)では、チャンスや運の重視は日本の青年に特徴的な傾向であることが指摘されている。これには互いに関連する2つの背景が考えられる。すなわち、日本の社会がなお実力主義に徹していないこと、及び国民性として日本の青年の依存性が高いことの反映であろう。

次に「学歴(6)」はやや必要とするものが多い。日本の社会が学歴社会であるといわれるわりには現役の大学生たちは、大学出の価値について結構醒めた評価をもっているように思われる。

「家柄(7)」、「財産(8)」、「父親の社会的地位(9)」、「縁故関係(10)」はあまり重視されていない。なお、これらの項目と、「努力(2)」との間には負相関が、「幸運(3)」との間には正相関がみられた。(いずれの相関係数も、検定の結果1%水準で有意であった。)

大学間の比較では、N大学(工科系)の方が「幸運」、「処世術」をいくぶん高く評価している。またA大学(文科系)の男女を比較すると、女子学生の方が、「幸運」「父親の社会的地位」「縁故関係」をやや高く評価している。これは女子学生の方に依存的な傾向が強いためであろう。

(12) あなたの職業意識についてお尋ねします。次の質問について、該当する答のところに○をつけて下さい。

- 1 職業に貴い、いやしいの区別はない
- 2 職業をもつことは、社会人としての最低条件である
- 3 人は仕事以外にも、何か人生の目標をもつべきだ
- 4 これからは、学歴よりも本人の才能や能力が重視されて昇進や昇給がきまる
- 5 個人の生きがいと経済生活、収入の多寡とは無関係である
- 6 職業上の成功は人生最高の幸福である
- 7 就職したら、昇進のためにはつらい仕事もがまんす

るつもりである

8 あなたは、自分のお父さんの仕事を尊敬に値する立派なものと思う

9 働くことは尊いことである

10 女性は出産後も仕事を続けるべきである

11 職業は生活を維持するための手段にすぎない

12 これからは、年功序列よりも能力を重視して昇進や昇給を決める企業が多くなる

13 生活ができるなら、人は定職をもたなくてもよい

14 就職したら、自分の生活のある程度犠牲にしても会社(団体)につくすべきである

15 条件が許せば、あなたもお父さんと同じ仕事にしたいと思う

16 仕事の内容が同じなら、女性の給与は男性と同じであるべきである

17 停年制度はあるべきである

18 これからは、仕事よりも、家庭や個人生活を重視する人が多くなる

19 たびたび仕事や勤め先を変えると、世間の評価が悪くなる

20 女性は結婚しても、仕事をやめるべきではない

21 仕事と趣味はまったく別でもかまわない

22 職業上の成功は学業成績と大いに関係がある

23 世間の人は、職業によって人間を評価しがちだ

24 一度就職したら、それを一生の仕事と思い、転職すべきではない

25 職業と学生時代の専攻(専門)とは関係なくてもよい

表13 職業観・勤労観(%)

No.	1 そ ま っ た く で は な い	2 そ う ぢ ら か と い え ば	3 い ど ち ら も	4 そ う ぢ ら か と い え ば	5 そ ま っ た く で あ る
1	6.3	13.0	22.7	29.8	27.9
2	0.3	0.3	7.0	25.3	66.7
3	0.0	0.7	7.8	24.6	66.7
4	0.7	3.3	19.4	39.1	37.3
5	2.9	26.4	29.8	22.7	17.9
6	8.2	16.0	42.9	23.8	8.9
7	5.5	12.3	34.7	41.4	5.9
8	2.2	2.9	20.1	38.0	36.5
9	0.3	2.2	7.8	38.4	51.1
10	16.7	22.0	47.7	8.2	5.2

11	11.9	35.8	28.3	19.7	4.1
12	1.4	2.9	25.7	47.7	22.0
13	21.2	32.4	25.3	14.9	5.9
14	14.1	35.4	32.8	15.2	2.2
15	31.3	28.7	26.8	6.3	6.7
16	3.3	10.8	20.8	30.2	34.7
17	4.4	10.4	33.5	30.2	21.2
18	0.3	3.7	30.9	46.6	18.2
19	4.4	5.9	18.6	46.6	24.2
20	8.2	14.9	54.4	14.9	7.4
21	0.7	7.8	10.4	27.2	53.7
22	26.1	27.6	33.9	12.3	0.0
23	0.3	1.8	7.4	54.1	36.1
24	15.2	17.9	33.2	25.0	8.5
25	7.0	36.1	25.0	20.5	11.1

紙数の制約上、全対象者の結果のみを表13に示す。まず、80%~90%の学生が肯定する項目を挙げると、「職業は社会人の最低の条件(2)」,「仕事以外に人生の目標をもつべき(3)」,「働くことは尊い(9)」,「仕事と趣味は別でよい(11)」,「世間の人は職業によって人間を評価しがち(23)」の5つである。これをみると、2と9は職業ないし勤労の意義を評価するものであり、「勤労は美德」とする古くからの価値観がうけ継がれている。しかしその一方で、3や2のように、人生の目標や楽しみを仕事以外に見出そうとするものも多い。

ここで仕事と私生活の間の比重のおき方をみてみると、「これからは仕事よりも家庭や私生活を重視するものが多くなる(18)」と考えるものが約65%あり、「職業上の成功は人生最高の幸福である(6)」に賛成するものは32.7%と少ない。また「自分の生活を犠牲にしても会社につくす(14)」とするものは17.4%しかない。このような青年の私生活重視、マイホーム志向は近年、各種の調査で指摘されてきているところである(たとえば、NHK放送世論調査所編, 1979)。

会社における昇進や昇給については、「学歴よりも本人の才能や能力が重視される(4)」,および「年功序列よりも能力が重視される(12)」に賛同するものは70~80%近くいる。大学生は、これからは学歴や年功序列よりも才能や能力が重視される時代がくると考えている。また、「昇進のためにはつらい仕事もがまんする(7)」ものも50%近くあり、昇進志向も結構ある。

「たびたび仕事や勤め先を変えると世間の評価が悪くなる(19)」と「一度就職したら一生の仕事と思い転職すべきでない(24)」に賛成するものはそれぞれ70.8%, 33.5%あり、保守的な傾向もみられる。

大学での勉学と職業の関連については、「職業における成功と学業成績は大いに関係する(22)」とするものは僅

か12.3%(反対意見43.1%)である。どうやら大学での勉学と卒業後の職業との関連についてかなり割り切った考え方をする学生も少なくないようである。

女性の職業については、「仕事の内容が同じなら男女同等の給与であるべき(16)」とするものは65%近くあり(反対意見14.1%), 男女平等観が青年たちの間ではかなり根づいているように思われる。他方、「女性は出産後も仕事を続けるべきである(10)」,「女性は結婚しても仕事をやめるべきではない(20)」に賛成するものは、それぞれ13.4%, 22.3%と多くはなく、依然として伝統的な性別役割観が窺われる。

父親の職業については、「自分の父親の仕事を尊敬する(8)」ものは多い(74.5%)が、「条件が許せば父親の職業を継ぎたい(15)」というものは僅か13%(反対意見60%)しかなく、大学生においては職業の世襲的意識は希薄である。

以上は全体の傾向であるが、大学別、性別についても言及しておこう。まずN大学(工科系)とA大学(文科系)を比較してもっとも顕著な差は、職業と大学での専攻の関係(25)についての意見の相違である。両者が関係なくてもよいとするものはN大学29.2%であるのに対してA大学は37.1%である。特に、男子学生のみをとりあげると、両大学間の差は15%ほどにもなる。就職状況からいっても工科系(N大)の学生に専門志向が強いのは当然であろう。そのためか、N大学の学生の方に昇進のためにつらい仕事もがまんするとか、自分の生活にある程度犠牲にしても会社につくすとするものの割合が幾分多い。概してN大学(工科系)の学生の方に仕事志向が強いといえる。

次にA大学(文科系)で男女を比較してみると、かなり多くの点で性差が認められる。まず、①項目10, 16, 20の女性の職業に関する問では、当然のことながら女子学生の方が男子学生より10~30%ほど賛成意見が多く、女子学生の職業志向の高揚が感じられる。②1, 9, 13, 23のような伝統的職業観に関連した項目では女子学生の方が賛同者が多い。③女子学生の方が卒業後の職業については専門志向が強く(25), 職業には生計の手段以上のものを求めている(11)。しかし、昇進のためにはつらい仕事をがまんする(17), とするものは男子学生より少なく、やや甘さが感じられる。④「職業は社会人の最低の条件(2)」, 「職業上の成功は人生最高の幸福(6)」, 「一度就職したら一生の仕事と思い転職すべきではない(24)」などは、女子学生の方が賛同者は少ない。これらは女子学生の方は好むと好まざるとにかかわらず、職業以外の進路を考慮に入れざるをえず、自ずから男子学生と違った職業観をもつようになっているのであろう。

6. 総 括

大学生（ほとんどが3年生以下）を対象として、質問紙を用いて“学歴観”，“魅力ある会社の条件”，“出世・成功の条件”，“職業観・勤労観”，などに関する調査を試み、彼らの意識傾向を分析してみた。結果は概ね穏当・保守的で観念的な判断傾向が目立った。調査結果による学生たちの全体的傾向を端的に表現すれば職業的自己分析にまだまだ甘えがみられ、未熟であるというところであろう。くわえて、学歴（大卒資格と大学の知名度）に昔ほどの名利に乏しく就職や昇進にそれだけではプラスになりにくい現況を少しは自覚していること、しかもそれをやや短絡的に「学歴無用」の意見とする傾向がみられる。技能や技術、考え方などの基礎を学ぶには学校は最適のはずであり、社会に出てからの個人の努力が加味されてはじめて開花するものであろうことから、大学で学ぶ目的意識が希薄のように思われる。また、年功序列より能力主義を主張（彼らがただ若いというだけで「能力主義」の真意と実体は多分わかっていないであろう）しながら、一方で「運」といった他律的なものへの関心が目立ち、その間の意識の整合性に疑問を感じる。また、昇進のためには辛い仕事もがまんするといいいながら、家庭・家族のことが脳裏から離れない—いわば家庭や家族を犠牲にしてまでも出世・昇進を望もうとするのではな

くて、家庭や家族のために、そして、それを犠牲にしない限りにおいて辛い仕事をがまんしようとする中庸を旨とする精神がよく表われているように思われる。そして、仕事と個人的趣味を明確に分け、個人生活の充実を相当に重んずる気風を窺うことができた。

今後は、調査対象者の選択に配慮しつつ、特定項目を選定して職業意識の時系列的変化や、構造についての探究が必要であろうと考えている。

文 献

- 1) N H K放送世論調査所編 1979 「日本人の職業観」 日本放送出版協会
- 2) 経済企画庁国民生活局国民生活調査課編 1978 「日本人の教育観と職業観——生活欲求の実態とアクセシビリティ——」 大蔵省印刷局
- 3) 総理府青少年対策本部編 1979 「組織で働く青少年の意識」 大蔵省印刷局
- 4) 日本生産性本部教育センター 1981 「働くことの意識調査報告書」 (財)日本生産性本部労働資料センター
- 5) (財団法人)日本青少年研究所編 1979 「日米高校生比較調査」 同研究所